

科目名	近現代日本文学特殊研究	担当者	イノウエケン 井上 健	期間	通年	単位数	4
-----	-------------	-----	----------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	大正期，昭和初期の日本文学・日本文化を，ジャンル論（探偵小説ジャンルの派生），クロスジャンル論（映画と文学の相互関係）の視点から，多様な読解を試みることによって，1920年代，30年代日本文学の意匠と表現の，新たなる位相を考察する。		
到達目標	ジャンル生成，異ジャンル間交渉の諸相に着目して再読，再検証していくことによって，正典や正統的ジャンルに偏して考察されてきた感のある，近代日本文学史・文化史の読み換え，書き換えを目指す。		
学修方法	まずは，教材，取り上げる作品をきちんと精読してから，一次資料，二次資料の参照に進む。レポート作成にあたっては，「何を明らかにしたいのか」という命題から出発し，それに基づいた構成，章立てを考え，「何が明らかになったのか」が読む者に明確に伝わるように記述する。その間，履修者と担当者間で，十分な質問やコメントのやり取りがあることが望ましい。		
スケジュール	前期：教材1のレポート課題(1)，レポート課題(2)の最終稿提出期限は，それぞれ，7月中旬，9月中旬とする。 後期：教材1のレポート課題(1)，レポート課題(2)の最終稿提出期限は，それぞれ，11月中旬，1月中旬とする。		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	90%	論文にふさわしい構成，記述になっているか，結論に一定程度，独自性があるか，を判断基準とする。
	平常評価	10%	学習姿勢全般を評価の対象とする。
履修者への要望	レポート執筆は，学位取得論文の基礎工事部分にあたる。短いレポートがしっかりまとめられなくては，学位論文執筆はとうてい覚束ない。まずは教材を，自分が主たる素材として取り上げようとする作品や言説のテキストを，しっかりと読解すること。その上で，課題，テーマを発見し，必要な調査をする。manabaのコミュニティや掲示板など，学習ツールを積極的に活用することが望ましい。		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	著者名： 江戸川乱歩 教材名： 『探偵小説四十年（上）（下）』（光文社文庫，2006年） 上 ISBN:978-4-33-474009-2 1,143円+税 下 ISBN:978-4-33-474023-8 1,260円+税
	江戸川乱歩「一般文壇と探偵小説」（1947）によれば、大正期の探偵小説は明治期とは逆に、先ず一般文壇にその機運が動き、それを追従する形で専門の探偵作家が生まれて来たという事になる。だが、外国語・外国語文学に精通していた、反自然主義陣営の若手作家たちが、この時期に詳らかにした探偵小説という新ジャンルへの旺盛な関心は、それぞれの文学の目指す方向性、方法との関連において、単なる探偵小説ジャンルの先触れという以上の意味を有したはずである。「一般文壇」と探偵小説をめぐる、乱歩の発言を手掛かりに、大正文学者にとって、探偵小説ジャンルの試みが、何を意味するものであったかを考えたい。
参考図書	江戸川乱歩『幻影城』（光文社文庫，2003年）ISBN:978-4-33-473589-0 933円+税 江戸川乱歩『続・幻影城』（光文社文庫，2003年）ISBN:978-4-33-473640-8 952円+税
履修上のポイント	乱歩が折に触れて発した探偵小説の本質、起源、現況に関するメッセージを手掛かりに、乱歩自らが、自己の出発点であったと繰り返し記している、谷崎潤一郎など大正作家による探偵小説の試みの意義を、同時代文脈から、あるいは、ポー、ワイルドなど、この時代、大正作家たちに偏愛された外国作家の受容との関係で、多角的、相対的視点から解明していく。なお、江戸川乱歩の探偵小説論、日本探偵小説の歴史を論じた書としては、ほかに『鬼の言葉』、『悪人志願』、『わが夢と真実』などがあり、すべて、光文社文庫版『江戸川乱歩』全集に含まれているが、同工異曲の論考がきわめて多いので、教材として指定した書を中心に考察を進めていって大きな不都合はない。
レポート課題 1	谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之介の作品の中から、探偵小説として読めるものを一篇取り上げて、それらの作品がこの時期に書かれた必然性について、作家論、同時代文脈などとの関係で論じなさい。 留意点： 『中央公論』定期増刊「秘密と開放号」（1918）の特集《芸術的・新探偵小説》には、谷崎潤一郎「二人の芸術家の話」、佐藤春夫「指紋」、芥川龍之介「開化の殺人」、里見弴「刑事の家」が掲載されている。本レポート課題を考える上で、この特集、およびその刊行時期は、一つの目安となってくれるに相違ない。
レポート課題 2	小説の語り・筋・構造をめぐる、いわゆる「谷崎・芥川論争」（『饒舌録』、「文芸的な、余りに文芸的な」、1927）においては、いったい何がいかように議論されたのか。谷崎、芥川のそれぞれの作品、および日本近代文学のその後の展開との関係で述べなさい。 留意点： 両者の主張と論点を整理した上で、それぞれの用いている用語や概念の、ずれや重なり合いに留意することが重要である。両者が自説を補強するために持ち出している外国文学作品にも、比較文学的視点から着目する必要がある。

基本教材 2	
教材の概要	著者名： 十重田裕一（編） 教材名： 『横断する映画と文学』（森話社，2011年）ISBN:978-4-86-405026-5 3,400円+税
	映画という新興芸術は、明治期末に日本に本格的に導入されるや否や、瞬く間に広範な観衆を獲得し、その、文学に拮抗する新ジャンルとしての地歩を確立していった。映画と文学とのクロス・ジャンルの交流は何を生み出し、大正期、昭和初期の日本文化に何をもたらしたのか。サイレントからトーキーへの推移は、いかなる転機でありえたのか。映画と文学の相互関係を、歴史的にたどることによって、1920年代、30年代日本文学の表現の、新たな位相を考察する。
参考図書	岩本憲児『サイレントからトーキーへ——日本映画形成期の人と文化』（森話社，2007年） ISBN:978-4-91-608778-2 4,400円+税
履修上のポイント	言語芸術と非言語芸術との相互関係を考察していくにあたっては、単に文学における「映画的表現」、映画における「小説的表現」を印象批評的に指摘するにとどまらず、そうしたジャンル混交を成立させた時代背景、時代思潮にまで踏み込んで、メディアとのつながりも視野に入れて、複線のかつ立体的に論を構築していくのでなくてはならない。文学における「映画的表現」に着目するに際しても、単に奇を衒っただけのものと、文学表現の根底に触れるものとを、識別して論じていく姿勢が求められる。
レポート課題 1	1920年代、30年代の日本文学作品を一篇、取り上げて、その表現の位相を、映像芸術との関係で論じなさい。 留意点： 映画制作に主体的に関わった谷崎潤一郎、川端康成の作品がすぐに思い浮かぶが、この時代の作家たちのほとんどが新興芸術である映画に旺盛な関心を示しているため、少し広い視点からそれを論じていただいで差し支えない。
レポート課題 2	映画と文学を比較検討する際に前提となるべき、基本的立脚点、視点はいかなるものか。実例をあげて論じなさい。 留意点： ヴァルター・ベンヤミン、ロラン・バルト、ジル・ドゥルーズなど、映像表現の本質について考察した先駆者たちの議論が大いに参考になるだろう。